

北原白秋の見た植民地台湾

——華麗島への憧憬と異郷への反撥

陳 萱

はじめに

「明治、大正、昭和の三代にわたる近代詩史上の巨匠で（中略）詩、短歌、童謡、民謡等々、詩のあらゆる領域で最も正統的な完成を示している」と称された北原白秋（一八八五—一九四二）は、一九三四年七月、日本の植民地だった台湾を訪問した。¹当時すでに国民詩人ともいふべき存在だった白秋には、多くの官公庁や各種の学校から、歌謡創作の依頼が寄せられていた。²台湾訪問も、台湾総督府文教局長だった安武直夫が、台湾教育会の名を通じて招聘したことによる。³この招聘について、白秋の台湾滞在中、大学を案内したり、一緒に食事をしたりした台北帝国大学教授の矢野峰人（一八九三—一九八八）は、「その託された任務は、台湾青年歌、台湾少年歌各一篇および、後に林投節となつて現れた民謡一篇を作る事、並びに全島各地に於て童謡に関する講演を数回行ふ事であつた」と述べている。⁴この任務に対し白秋は、「主として内台融和と国語普及の精神とを、歌謡を以て宣告し達成しようとするのがその意図であつた。私は勇躍した」（一〇一頁）と、並々ならぬ意欲を見せたのだった。⁵

日本による植民地統治の間に台湾を訪れた、内地の文人や作家は数多い。それらの文人のほとんどは、台湾に着いてから、総督府からの招待を受けたり、案内されたりして台湾を旅行した。しかし白秋のように、総督府から招聘を受けて台湾を訪れた人物は、極めて異例である。このことから、総督府が当時すでに日本の国民詩人的な存在であった白秋を高く評価し、彼の力を借りて日本語の普及を図ろうとしていたことが分かる。白秋の台湾滞在中は、文教局社会課の囑託で、歌人若山牧水の門下でもあった柴山武矩が随行した。

この台湾訪問の経験に基づき、白秋はのちに『華麗島風物誌』に収められる紀行文「第一印象」、「城隍祭」、「台北日日素描」、「台北夜情」、「台湾旅行について」などを書いた。また、詩篇として、「台南旅情」、「蕃童」、「林投節」、「台湾青年の歌」、「台湾少年行進歌」などを記し、総督府に対する任務を果たした。

他にも、白秋の台湾での講演の様様については、「児童自由詩」という題で『台湾教育』誌の九月号と十月号に記録が連載されている。⁶また、『臺灣日日新報』にも矢野峰人や島田謹二の白秋に関する評論記事が載せられている。⁷

それら台湾を題材とした作品は、白秋の植民地台湾に対する認識をくつきりと表現している。中でも、熱帯地方としての台湾に対する憧憬、および台湾社会における中華文化への期待には特色がある。また、白秋は植民地支配下の台湾に日本語を普及させ、日本文化を定着させることをも思い描いていた。しかし、台湾を訪れてからは、実際に目にした現実との違いに驚き、落胆せざるをえなかった。白秋は、台湾社会の大部分を占める台湾人、すなわち本島人に対し反撥をあらわに示しただけでなく、総督府の統治方針に対する不満も感じた。⁸このような台湾観の変化は、白秋の台湾訪問前後の認識の相違を表すとともに、彼の台湾に対するイメージを浮き彫りにもしている。

台湾訪問は、白秋の文学にとって重要な要素であり、また日本人作家の台湾に対するイメージを分析する上でも欠かせないテーマである。にもかかわらず、これまで白秋の台湾旅行についての研究は皆無に近かった。⁹本論は、白秋が台湾について記した紀行文などに基づき、その台湾に対する認識の輪郭、およびその特徴を明らかにすることを目的とする。

一、台湾に対する憧憬の描写

台湾総督府文教局の招聘に応じて訪れた台湾の地について、白秋は『華麗島風物誌』序文の冒頭で、「華麗島とは葡萄牙の航海者によつて呼ばれた *Ilha Formosa* である。いふまでもなく常夏の蓬莱島台湾の美称であつた」(二五頁)と語っている。未知の土地台湾に対する白秋の認識は、このように当初は浅いものにすぎなかった。しかしこの一文からも、「華麗島」という名称に含まれる、華やかで美しいイメージ、および伝説では仙人の住む仙境と伝えられる「蓬莱島」の名から浮かぶ、俗界を離れた清浄で美しい場所というイメージには、白秋の台湾に対する理解や憧憬が含まれているだろう。

「華麗島」での旅の行程について、白秋は次のように記す。

昭和九年の六月二十九日、私の乗つた蓬莱丸は神戸を出帆した。越えて八月十日に、今度は高千穂丸が同じ航路を基隆から逆に私を送り還してくれた。この間に私の歴遊した個処は、基隆、台北、草山、北投、淡水、新竹、台中、彰化、埔里、日月潭、嘉義、阿里山、高雄、屏東、サンテイモン蕃社、

恒春、鶯鑾鼻、四重溪、牡丹灣、大武、軒子崙、知本、台東、呂家、馬蘭社、卑南各蕃社、花蓮港、太魯閣溪、バタガン蕃社、蘇澳等に亘り、ほとんど全島を一巡した。(一〇一頁)

約四十日間の滞在中、交通事情の不便にもかかわらず、白秋は台湾を一周した。開発の進んだ台湾の西部を、北から南へと縦断しただけでなく、まだ開発がほとんど進んでいなかった東部でも、様々な先住民の居住地まで足を延ばし、台湾全土を回った。それを可能にしたのが総督府の力であることはいまでもない。同時に、おびたしく羅列されたこれらの地名は、白秋が積極的に台湾を見て回り、認識を深める意図を持っていたことを物語る。またそれは、台湾を様々な角度から広くかつ深く認識することで、総督府から与えられた任務をより完全に成し遂げようとする白秋の意欲をも表している。

白秋が台湾総督府文教局の招聘に喜んで応じた背景には、白秋が日本による台湾統治に賛同していたことが挙げられる。しかしこのような公的な理由のみが、白秋を台湾へ行かせたのではないだろう。植民地で国語の普及を図ろうとする意欲とともに、白秋には、「琉球の海、多彩列島を遥かに越えてかの華麗島の風物に接することは多年の宿望であつた」(二五頁)と、沖縄よりさらに南に位置する台湾という土地への憧れもあった。「華麗島」の風物に対する憧憬こそが、白秋の台湾観察を深め、そのイメージを多層で豊かなものにした、重要な理由の一つと考えられる。

白秋が未知の台湾に対して抱いたイメージは、まず何よりも、熱帯地方の自然風景や漢族による中華文化に集中していた。¹⁰これについては、『華麗島風物誌』の序文にうかがうことができる。中でも、台湾特有の果物、草木、花卉、野獣、鳥類などの名前を羅列しつつ、詩歌の最初と最後で「椰子はそよぎ、風は光り、さうして朱砂しゅさの廟みやうは庇が反る」(二六頁)という文句をくり返す点に、それはよく表れている。これら椰子のそよぐ姿や溢れる光線などを通して表現される熱帯特有の風景とともに、「朱砂の廟」に集約されている漢族の文化も、白秋の台湾に対するイメージの重要な部分を構成していた。

漢族の文化に対し白秋がどう感じたかについては、後で詳しく論じるとして、ここではまず、台湾の熱帯風景に対する白秋の憧憬について見ておきたい。

華麗島の名によつて、私に想像されてゐた台湾の風光は、まづ、第一に椰子の葉の鳴る基隆の丘であつた。朱砂と鮮かな草の緑、光りかがやく積雲、

透明な青磁の空、空よりも濃い藍碧の潮、その酷暑の大気に太く緩く響きをこめて、私たちの蓬莱丸の汽笛が吼える。さうした明るい亜熱帯への原色版風の期待が、何か裏切られたものを私に感じさせた。私は幾度も眼鏡の曇りを拭かねばならなかつた。何故ならその港口へかかると丘陵は憂鬱に黝み、岸壁には鉄筋の鑄びを交へた灰色の混凝土の幾聯かの建物のみが眼に付いただけであつたから。これでは、九州の門司あたりとさして変りはないかとすら私には眺められた。(三一頁)

台湾に到着する前から、白秋が「華麗島」として認識した台湾、その名前を通してのみ想像していた台湾とは、「原色版」という言葉から分かるように、多種多様な植物で溢れ、色鮮やかな自然に満ちた、光線のまばゆい、明るく多彩な亜熱帯地方の風景であつた。¹¹

しかし、基隆に上陸した白秋が実際に目にしたのは、黒味がかった丘陵と、錆びた鉄筋を露出したコンクリートの建物という、極めて殺風景な景色であつた。丘陵が「憂鬱」に見えたのは、単に色が暗かつたせいだけではない。むしろ、内地の九州と変わらない基隆の風景に対する、失望や落胆の大きさが作用したと思われる。これについては、白秋に一年遅れて台湾を訪れた野上彌生子による基隆の描写を参照しても、推測が可能である。野上の描く基隆港とは次のようなものである。

船べりを赤や青に塗つたジャンクが、鳶いろの帆をあげて、さも異国の怪鳥めかしく浮かんでゐる。藍木綿に尖つた竹の子笠の船頭、なにか叫んでゐる高調子の支那音。市街は碧い港湾のすぐ縁から赤煉瓦の層になつて殷賑にひろがつてゐる。岬の山肌も鮭いろの鮮明な赤い土で、ところどころ黒い骨張つた岩が突きだし、それに低い緑樹がべつとりと油絵具をなすりつけたやうに群がつてゐる。あらゆるものが色彩的で、もう十月と云ふのに夏のさなかのやうな濃厚な熱帯の午後の日光が、それらの風景を幅びろい光線できらきら隈どつてゐる有様は、内地ではどこの海岸でも見られないもので、まことに遠い海の常夏の島についたといふ思ひをしみじみと感じさせた。¹²

野上は鮮やかな色を数多く羅列することで、豊かな色彩の場として基隆港を描いている。また、濃厚な日差しやそれがもたらす光の多様な変化を描写することで、一つの典型的な熱帯風景を表現している。これらの描写から浮かび上

がる基隆港とは、日本内地とは大きく異なる、遠い南の海の異国情緒を感じさせる場所である。¹³ 白秋と野上の間、基隆港の風景描写における大きな相違は、白秋が台湾に対し過剰な期待を抱いていたため、期待と異なる現実に失望したせいではないか、と推測される。

色鮮やかな亜熱帯風景への期待と、現実の風物に対する失望は、基隆から台北へ向かう汽車の窓から見た風景の描写にも表れている。「水田や椎や榎・雑草・たまたまに篋、これでは九州ではないか。台湾は何処にあるのかとさへ思へた」(三一頁)とこぼす白秋の言葉には、期待と異なり自身の出身地である九州とさほど変わらない台湾の風景への失望がにじんでいる。

ただしこのような落胆や失望は、台湾を旅する中で、折りに触れて目にした風景により、次第に変化していく。「台北白日素描 第一日」の冒頭で、街路樹として植えられた鳳凰木について、白秋は次のように描写する。

鳳凰木は、枝ぶりもその葉ぶりも、合歡に似て合歡よりも喬く、品もあり、気韻もある。その花もまた、朱い蛾眉のやうに開いて、しかもなほ繊細で純紅である。やや離れて見れば、まことに鳳凰の翼を張り、尾羽を垂らして、その玉冠の飾りをおるかなしの微風にそよがす、さうした高貴の姿が感じられた。隠見する花の、何かまたあの多彩な眉や眉がしらに髣髴たるものがあつた。

台北に着いた日、私は教へられて、成程と自動車の窓から仰いで知つた。(中略) その花を見てから、初めて蓬萊の島らしいほんたうの台湾が、私の眼の中にちらちらし出した。感覚としてちらちらし出して来た。(五三頁)

鳳凰木は亜熱帯から熱帯地方にかけて多く見られる喬木であり、台湾では街路樹として随所に植えられている。¹⁴ 基隆港の「憂鬱」な風景に失望した白秋も、台北市内に入り、車窓から鳳凰木を目にすることで、「蓬萊の島」として思い描いていた台湾を目の当たりにする。白秋にとって「蓬萊の島」とはどのようなものか、この鳳凰木の描写にうかがうことができよう。つまり、好ましい気品があつて、風雅な趣きを持ちながらも、繊細で純紅の花を通して示される、華麗な印象をも兼ね備えた土地である。また、美しい玉冠をかぶり、翼を拡げて空を飛ぶ鳳凰によって象徴される、高貴な品位を有しつつ豊かな活気をも感じさせる、そんな土地である。このように、台北を見物した初日、車窓から目にした鳳凰木を通して、来台前に抱いていた台湾のイメージを白秋は巧みに表出

している。

白秋の抱く台湾のイメージは、この鳳凰木を通して示された「高貴の姿」だけに留まらない。他の訪台経験を持つ野上彌生子や徳富蘇峰などの日本人作家と比べると、内地とは異なる亜熱帯の風物に強いこだわりを見せる白秋は、文教局長の官邸訪問の際に、次のように記している。

広い家の空間は、ただに亜熱帯らしい光線だけが、庭から黄と緑に明つてゐる。やや翳りかけてゐるが、暑熱は甚しい。

マンゴウ 木瓜 竜眼 卓上の果物の皿はどれを見ても芳ばしく味覚をそそる。私は片端からむしやぶりついたが、前栽の南洋植物のこぼれ日には、しきりに聴き馴れぬ小鳥の声がした。

「台湾に来たやうな気がやつとして来た。」と、私は白く輝く^マフキン^マのはしで、唇のまはりを拭く。(中略)頑童嗜食之図といふ風だ。(六一頁)

亜熱帯特有のまばゆい光線、南洋の植物が反射する鮮やかな黄色や緑色、肌を感じる熱気や、暑い地方に欠かせないマンゴーや木瓜などの果物、その果物をもたらす味覚の満足、さらに日本では耳にしたことのない小鳥の鳴き声など、まさに五感を鋭く働かせた描写といえよう。このように、五感を十分に発揮して亜熱帯地方特有の風物を存分に味わうことで、白秋は台湾にいることをようやく実感した。これによって、白秋の台湾に対する憧憬は満足させられたが、それは同時に、白秋が亜熱帯地方にある台湾を内地と異質な存在として認識し、規定していたことをも意味している。

ただし、このような満足を味わうことができたのは、植民地の支配者側に属する高官の住む、広々とした官舎での集まりにおいてであり、また、ここでは引用しなかったが、台湾人の女中が傍で恭しく奉仕したおかげであることを、指摘しておきたい。それらに思いを馳せることのない白秋の、植民地の支配者側に属する人間の無意識の倨傲が、ここには表れている。

さらにもう一つ指摘しておきたいのは、台湾が日本の植民地となって四十年近く経ったにもかかわらず、当時の日本の文人や作家にとって欠かすことのできない教養の一つであった漢文化を表す事物を、白秋が無意識に求めている点である。台北到着の初日、総督府の人に連れられて台湾神社へ参詣に向かう途中、車窓から見かけた風景は、次のように描写される。

無数の鷺を追つてゐるのである。台湾神社への直通路で、両側の並木には午後四時頃の嵐が強い印画風の黒白を分つてゐたところで、尖状の竹の笠に藍色の服、半袴の、面屈みの爺^{とひつ}あんの、それが一本の竹棹を揮つて行く。(中略)

同じく童謡画趣として、水牛耕田の図が左の窓に映つて来た。田は割りが高く、水はよく張り、いかにも仲夏らしい積雲の影が遠見には層を成して照り輝いてゐる。そのこちらで、三々五々と大きな角の水牛がどうどう巡りをしてゐる。中には蹲つたのがゐれば、白鷺を背に留めたのがとろんと涵つてゐる。白鷺の多いことは、空を翹り、畔を降り、水を歩いて、白い茸毛をそよがしい、冠り毛を靡かす。童子よと、私は心に叫ぶ。篋子は居らぬか。唐子は居らぬか。(五四頁—五五頁)

竹の笠をかぶり藍色の服を着た老翁、水を張った田と、その上に映る、照り輝く真夏の積雲、そして耕作に励む水牛とその背中に留まった白鷺などを、「強い印画風の黒白」で描写することで、日本にも広く知られていた漢文化の一つである南画に類似した風景を白秋は表現している。ただし、ここで一言述べておかなければならないのは、台湾の風景を一幅の南画として描写したのは、白秋だけではないということである。一九二九年に台湾を訪問した徳富蘇峰も、台湾の風景を「南画」という言葉を用いて描いた。¹⁵また野上彌生子も同じく、基隆から台北へ向かう車の窓から見た風景を、「南画」という言葉で表している。¹⁶台湾を訪れた時期は異なるが、彼らが一樣に台湾の風景を南画的なものとして描写したのは、日本の植民地支配を受けながらも、台湾には漢文化の影響が依然として大きいこと、また旅した日本人作家たちもそう考えていたことを物語っている。

彼らは訪台した時期が異なるだけでなく、世代も大きく異なる。一八六三年生まれの蘇峰が、幼少期から培った漢文化の教養を通して、台湾の「南画」的な風景をごく当たり前の、愛着や親しみを感じさせるものと考えるのは、理解しがたいことではない。しかし、一八八五年生まれの野上が、台湾の「南画」的な側面を「異国的で、珍らしい」ものと捉えるのに対して、野上と同じ年の白秋は、それに対して強い憧憬を抱いている。いかにも南画的な趣きを豊かに具えた風景を目にして、「童謡画趣」と称える白秋は、さらに南画でよくモチーフとされた「篋子」や「唐子」の姿を求め、台湾の漢文化的な側面に対し率直な愛着を表明している。

以上のように、台湾の「熱帯」と「漢文化」という二つの側面に憧憬を持ち、台湾の風物に積極的にそれらの要素を求めようとした姿勢は、白秋の台湾に対するイメージの中でもっとも大きな特徴の一つといえよう。

二、台湾に対する反撥の表現

「熱帯」と「漢文化」という二つの側面に強い憧憬を持ちながらも、白秋は旅が進むにつれて、現実の台湾の様々な側面を目にし、次第に反撥を覚えはじめ、極めて批判的に台湾を描くようになる。まず、白秋が強い抵抗感を示したものとしては、漢文化においては一般に見られる豊麗な彩色を挙げることができる。台北に到着した日、台湾神社を参拝したついでに、白秋は淡水河畔にある劍潭寺にも足を延ばした。見学した寺について、白秋は次のように描写する。

その幾重かの庇の端反^{はぞり}や、対の廻廊、壁の多い築地門などに、怪しいまで赤い画趣を仰いだものだが、あの門扉の精密な透かし彫りや、あの内陣の寧ろ暗鬱な極彩色にはどうしてもそぐはぬものが感じられた。少なくとも俗悪なくらゐに、濃厚で執拗過ぎる支那臭は、性に合はないらしく、これは祖先伝来の血が反撥する、或る重大なものが、私の心の深处にも潜んでゐるのではないか。(五〇頁)

幾重にもなる庇の端反、左右が対となった廻廊に築地門、また透かし彫りを施した門扉などは、いずれも漢族社会でよく見られる建築様式である。日本の伝統的な建物と大きく異なるため、内地から来た人々には珍しく見慣れないだろうが、その一方で、これらは異国情緒をかき立てる要素となったと思われる。野上彌生子は、劍潭寺ではないものの、台北に着いた日の夜、漢族の居住地域である大稻埕を見学した際に、類似の建物を目にした印象を記している。「夜の不思議な廻廊を、長い列柱にそって、なにか夢想的にぐるぐる歩きまはつてゐる人の群を見るやうな差覚を生じさせる。大稻埕と呼ぶ本島人の賑やかな居住地域にはひとと、この童話めいた左右の廻廊はますます妖しげにも美しい異国的なものになつた」と述べ、竜山寺の建築について、「正面には、丹碧の燦らびやかな、反り返つた屋根と彫刻に飾られた建物が、わだつみの底から浮かびあがつて竜宮城といったやうに聳えてゐる」と記している。¹⁷

野上の文章は、見慣れない建築様式を美しい異国的なものと呼んでおり、目新しいものに対する心のはずみがうかがわれるが、ここにはその建物がもたら

す暗い印象や違和感などはない。一方白秋は、野上の感じ方とは対照的に、先に台湾の風景を南画と見なして愛でながらも、劍潭寺の建物に異国情緒を感じることはなく、「暗鬱」さを感じ取ったり、低俗だと貶しめたりして、明らかに拒絶反応を見せている。

白秋の拒絶反応のもっとも大きな理由は、「濃厚で執拗過ぎる支那臭」という言葉に表現されているように、劍潭寺の建築物には漢族文化の特色が濃厚で、それが際立って見られるためではないかと推測される。また、「祖先伝来の血が反撥する」というきわめて感覚的な表現から分かるように、白秋は日本人としての優越感を抱いている。それは、被支配者である漢族の文化を「支那臭」と貶しめることにおいて、支配者側に立つ人間の傲慢さをも憚ることなく示しているのである。

このような漢族の生活文化に対する強烈な違和感や蔑視は、紀行篇に収録された「城隍祭」にも読み取ることができる。台北に着いて三日目に行われた「城隍爺の遊境」、つまり「城隍祭」を見学した際の表現は、より露骨である。「城隍」は普通、本島人によって親しみを込めて「城隍爺」と呼ばれ、都城府県の守護神とされている。台北の本島人の町である大稻埕で行われる「城隍祭」は、当時台湾でもっとも盛大なもので、白秋も文教局長に連れられて当地の富豪陳天來の招宴に参加することになっていた。「行つてみると、本島人街の大稻埕の大通りは雑鬧を極めて、すでに練りはじめた幢幡や旌旗の五彩が眼を射り、日に耀き、満ち溢れた群衆は（中略）いつばいに押しへし、入り乱れてゐる」（四〇頁）と、当初白秋は祭りに特有の賑やかな雰囲気や冷静に記述していた。

ところが、祭りの進行につれて、白秋は次第に苛立ちを見せはじめる。祭りの行列について、幢幡や旌旗、馬鹿囃子、楽隊、および仮装人形、閣台、善男善女の行進する順序、おびたしい楽器、品物の名前と各種の色彩の列挙、仮装した人々の描写、耐え難いほどの喧騒など、白秋は極めて詳細に記録している。ここから、「城隍祭」は白秋にとって極めてもの珍しい体験で、祭りを面白がっていたと想像される。しかし、それらの記述の間に、白秋は時折、「喜劇じみた、しかも毒々しく豊麗な行列は本通りでないここにも練り込んでゐて、その騒ぎといつたらなかつた」（四〇頁）といった言葉をはさんだり、「これではお練りでなくてチンドン屋の極彩豪華版だ」（四一頁）と述べたり、「総ての行列が、さも楽隊の共進会のごとく、優先の決勝のごとく、驕奢と眩輝と誇大と虚飾と、相競ひ相喧騒して、何処へ行くのか」（四六頁）と皮肉に描いたりもしている。ここには、漢族の伝統においてきわめて重要な祭りを、精緻な文化と

は無縁の低俗ものと見なし、嫌悪を感じていたことが表れている。

こうした豊麗かつ喧騒に満ちた庶民文化に対する嫌悪は、白秋の漢族に対する反撥へとつながっていった。行列の最後には「贖罪行列」が来る。これは、懺悔することで過去一年間に犯した罪や過失を消し、今後の福運の隆昌を求める群衆の行列である。白秋はこの「贖罪行列」に対して、「巫山戯るなどいひたいのだが、これが民族性なのかもしれぬ」（四八頁）と決め付けている。この評言には、異質なものを理解しようとする努力や知性、受け入れようとする寛大さは、微塵も見られない。そこにあるのは、見慣れないものを安易に俗悪と決め付ける軽率や傲慢のみである。したがって、祭りの様子を仔細に記録した「城隍祭」の最後で、台湾に来てもっとも強く感じたことは何かという台湾在住の内地人の質問に対し、白秋が「日本人に生れてつくづくよかつたといふ事です」（四九頁）、「ほんとに日本人に生れて来てよかつた」（五〇頁）と繰り返し答えるのは、不思議でも何でもない。ここに至って、白秋にとって植民地台湾はむしろ、反撥の対象であり、また日本人としての優越感を確認する場所となっていたと思われる。

そもそも総督府の招聘で台湾を訪れたため、宗主国の人間の立場から物事を考え、支配者の意識を強く持って台湾を観察する白秋が、漢族の庶民文化を低俗なものと思い込み、反撥を覚えるのは、不思議なことではない。そんな白秋は、「内地人といはず、台湾人といはず、蕃人といはず、全島の長老、青年、それらの各職業の一般民衆に対し、私は私の道とするものを以て、詩魂を以て、詩そのものを以て、深切に仕ふところがなくてはならぬ」（六八頁-六九頁）と、積極的に総督府の国語政策に関与し、台湾における言語政策の推進に協力しようとした。しかし、言語政策に積極的に関与することは同時に、白秋が植民地台湾の現実と直面することを避けられないことをも意味している。

これについては、白秋が酒場やカフェへ連れられて行った記述からまず見ていきたい。名前も知らないカフェで、「すぐに大勢の女給が私たちの卓子たかに群つて来たが、いづれも本島人で、その半分も国語を話す者は無かつた。（中略）そこらが気が狂ひさうに騒がしくて、掛けるレコードも掛けるレコードも、東京音頭や桜音頭や、この頃の流行歌ばかりであつた」（八六頁）と述べ、さらに「来る客も来る客も本島人であつた。（中略）聴くものは尽く台湾語でわからず、中には密かに或は露はに、女給と抱き興じて、相共に喋々喃々たるものであつた。／にも拘らず、レコードの音頭とジャズのみが、しきりなしに国語で歌つて囃して」いる（八八頁）と記す。女給も客も本島人である以上、台湾語で話

し合うのに何の不思議もない。しかし、台湾島の隅々までに日本語が普及し、酒場の酔客やカフェの男女の会話も日本語で交わされていると期待していた白秋は、これに落胆した。また、聞いても理解できないにもかかわらず、単に見栄を張ったり流行を追い求めたりするために、至るところで日本語の流行歌のレコードをかけていると聞いて、国語を絶対的なものと考えていた白秋には、腑に落ちないものがあっただろう。

最後に白秋は、次のような言葉で、台湾における酒場やカフェ体験を語っている。

言葉が通じないことが、何よりも不興であつた。

私は、遠く遠く日本を離れた、全く異郷の酒場にある心地がした。

かういふ台湾の筈ではなかつたがと思つた。(九〇頁)

ここに至って、台湾に来る前に期待していた台湾と、国語すなわち日本語がそれほど普及していない現実の台湾との間に存在する、大きな隔たりに直面した白秋は、戸惑いや失望を見せる。つまり白秋は、かつて想像していた、日本語が隅々にまで普及した台湾など、決して現実には存在しないことを、思い知らされた。したがって、植民地の最高支配機関である台湾総督府の官員に囲まれて飲酒や会話を楽しむつもりだった白秋は、日本の範疇から外れた台湾に対して強い違和感を覚え、まったく親しみを感じない異郷にいる寂しさを身に沁みて感じたのである。

カフェで現実がもたらす落差を体験した白秋は、本島人だけでなく、次第に植民地にいる内地人の思わしくない生活にも触れるようになっていく。その前に本島人はどのように白秋の目に映っていたかを確認しておく、「大稲埕は活気と物慾とが、その毒々しい色彩と共に、雑然とはしてゐても、華々しく、執拗にも根強くも見えた。招牌や対聯の美辞麗句はどうだ」(九一頁)と、貶す言葉で形容するものの、本島人の活気や生命力は生き生きと描出されている。それに対し、「柴町通の内地人の近代市街は、いかに大厦高樓が櫛比しても、白昼の幻惑が弱く、乾燥して、色にも光にも形にも用器画趣の平板があつた。何か往来の人あしにも情味がなかつた。官庁式の商店街といふ気がしてならなかつた」(九一頁)と白秋は述べる。つまり、絶対的な権力を有する植民地政府に力強く援助されながらも、内地人の町は無味乾燥で、繁盛とは程遠いものとして白秋の目に映っている。

台湾における内地人の置かれた厳しい経済事情について、白秋はさらに次のような観察を綴っている。

生気がない。いつたい内地人の商家は商人は何をしてゐるのか、あれでいいのかと思へた。私の直感したところ甚だ頼り少なに感じられた。色々訊いてみると、全く彼らの商権は薄弱で、本島人のそれに極度に圧倒されてゐるらしく、内地人はただに内地人と果敢ない共喰ひをするに過ぎないやうに思はれる。(中略)内地の商人は(中略)ただ本島商人の跳梁跋扈に手をつかぬるばかりなのだ。第一に内地人の影の少ないのにも驚いた。台北でも支那臭に充ち満ちてゐる。(九一頁—九二頁)

冒頭の「生気がない」という一言は、客足の疎らな内地人商家の陥っている状況を、実に巧みに描き出している。ただし、内地人の無気力や頼りなさを叱咤する一方で、白秋はその責任を本島人に帰させようと努めている。本島人の「執拗」、「勤勉」、「貪婪」、「商才」(九二頁)などを列挙し、人数の少ない内地人が台湾人によって圧倒されていると理由づけている。結局、本島人のことを「支那臭」という感情的な言葉で貶していた白秋の苛立ちは、この時点で抑えきれないものにまで高まっていたと思われる。¹⁸

以上のように、植民地台湾における内地人と本島人の間の厳しい経済競争、その競争において圧倒される内地人の姿は、台湾に到着する前には想像もしなかったもので、白秋にとって大きな衝撃だった。そしてその衝撃を通して、白秋は植民地の現実に対して苦い認識を持つようになり、また台湾に対し感情的かつ反撥的なイメージを形成することになったのである。

終わりに

白秋の台湾訪問の八年後、一九四二年に、大政翼賛会文化部によって編纂、出版された『大東亜戦争 愛国詩歌集』は、白秋の「皇軍頌」を収録している。その詩歌の前半は次のようである。

轟けよ萬世の道の臣、大御軍、
いざ奮へ、いくさびと、揺りとよむと。
げに猛き醜の御楯、大やまとの
天皇の大御軍、征き向はむ。

空ゆかば身も爆ぜむ百雷、
海ゆかば裂くなだり魚雷。¹⁹

このように白秋の詩は、日本軍を賞賛し、さらなる活躍を期待している。ただし、これは日本が大東亜戦争に突入してから編纂された詩集で、白秋が戦争に対しどれほどの賛同の意思を持ってこれを書いたのか、確認することはできない。しかし、この詩集が出版される八年前の一九三四年、日本詩壇においてすでに国民詩人の地位を獲得していた白秋は、総督府文教局長の招聘を喜んで受け入れ、台湾を訪れた。その際に、白秋は宗主国側の人間の立場から、総督府が台湾で推進する国語政策、つまり、日本語の普及に詩人として積極的に関与し、また日本国民として奉仕しようとしていた。旅行が終わってから、白秋は約束通り、「台湾青年の歌」、「台湾少年行進歌」、「林投節」などを作って文教局に酬いた。しかし、宗主国側の人間に自らを規定しようとした白秋は、植民地台湾では決して楽しく、美しいものばかりを見ていたのではない。

もちろん、台湾に到着する前から抱いていた、熱帯的な風物に対する期待や、南画的な風景に対する憧憬は、確かに満たされた。その一方で、台湾の日本内地と極めて異質な側面を発見し、嫌悪や反撥を覚えたのも事実である。何よりも白秋にとってもっとも大きな衝撃は、台湾は想像していたほど日本化されておらず、内地人が経済的に弱い立場に立たされていることだった。「今のやうでは百年経つても、この台湾が我々の日本になりつこはないでせうよ。」といふことも聴いた。」(九二頁)と、台湾に在住する内地人の苦い声を記している。また白秋は、「兎にも角にも台湾は本島人の世界なのだ」(九三頁)と苦い現実を認識してもいる。

そのような苦い認識は、訪問する前の白秋の台湾に関する認識が、あまりにも不足していたことと無関係ではない。「実をいふと、渡台に際して、最も私の恐れたのはこのマラリヤの伝播者アノフエレス蚊だつた(中略)が、本島人のかうした底力の深い強勢さに就いては、少しも思ひ及ばなかつた。」(九四頁)と述べたり、「不思議なことに、私の予想の中には、内地人の商人のことはすっかり忘れられてあつたのだから。尤も大抵は日本だと極めてかかつてるたせるかもしれぬ」(九五頁—九六頁)と語ったりする白秋は、植民地台湾に対し十分な知識を持っていなかったことを告白している。

白秋にとって日本の植民地である台湾は、憧憬の対象でありながらも、日本内地とは異質の存在で、反撥、もしくは否定的な感覚で捉える対象でもあった。

にもかかわらず、白秋は日本の植民地台湾支配に対し疑問を抱くことはまったくなかった。植民地における苦い現実を認識しても、白秋は日本の植民地支配に終始賛成の意を表明している。植民地支配に対する変わらぬ賛成の意はさらに、大東亜戦争の際、彼に前述した「皇軍頌」のような歌を書かせたのではないかと思われる。この点は、彼と、台湾を訪問してから日本政府の植民地支配、軍事行動に対して疑問を抱くようになった野上彌生子と、もっとも大きく異なるといえよう。

注

- 1 河村政敏「北原白秋論—その詩的眞実をめぐって」『国文学解釈と鑑賞』第六九巻五号（至文堂、二〇〇四年五月）一四頁。
- 2 この台湾旅行を記録した『華麗島風物誌』において、白秋自身も、台湾民謡の製作について語りつつ、「私はよく国民的団体や、諸学校の依頼を受けて、その行進歌や校歌を作する。（中略）国民詩人の一人として、私は、児童に我が新しい童謡をも、この二十年近く献げて来た」と、自ら童謡詩人としての責任を感じていたことを記している。北原白秋『華麗島風物誌』（彌生書房、一九六〇年）八〇頁—八一頁。以下、白秋の台湾旅行に関する引用はすべて該書により、本文には頁数のみを記す。また、上田誠二「1920-30年代の北原白秋の芸術教育活動による公民育成」『歴史学研究』828（歴史学研究会、二〇〇七年六月）を参照。
- 3 白秋は安武直夫について、「同郷人でもあり、弟鐵雄の親友でもあつた」と、同郷の誼を語っている。（一〇一頁）
- 4 矢野峰人「台湾に於ける北原白秋氏」『矢野峰人選集1』（国書刊行会、二〇〇七年）一二〇頁。初出は北原白秋『華麗島風物誌』、七頁。
- 5 上笙一郎は、白秋が当時の日本の植民地すべてを旅行したことについて、「白秋の許へは、日本の植民地的な拡張を望む人びとの支持が集まり、その人氣が、彼を日本の内外全植民地への旅にいざな」ったと評している。上笙一郎「北原白秋『フレップ・トリップ』の旅（上）」『日本古書通信』第969号（日本古書通信社、二〇一〇年四月）二七頁。
- 6 北原白秋「児童自由詩」（一）『台湾教育』九月号（台湾教育会、一九三四年九月）四頁—五頁、「児童自由詩」（完）『台湾教育』十月号（台湾教育会、一九三四年十月）一二頁—三二頁。
- 7 「白秋特輯號」『臺灣日日新報』一九三四年七月二〇日。
- 8 植民地時代、総督府は日本内地出身の日本人を「内地人」と呼び、また台湾出身の漢族を「本島人」と呼んでいた。本論での呼称もこれに基づく。
- 9 わずかに、陳藻香「紀行文に見る日本人作家の心」『天理台湾研究会年報』第二号（天理台湾学会、一九九三年四月）、邱若山「佐藤春夫と北原白秋—その台湾紀行経験を通して」『天理台湾研究会年報』第三号（天理台湾学会、一九九四年六月）が挙げられる。
- 10 野上彌生子や徳富蘇峰などの日本人作家と異なる点として、白秋は台湾の先住民の伝

統を感銘の深いものとして語っている。例えば、牡丹社で観賞したアミ族の舞踊について、「牛馬の靈妙音と盛装したアミ族の心からなる歓迎の舞踊に与つたことは、恐らくは一生の思ひ出として私の琴線に常に新たなるものが響くであらう」（二五頁）と記す。また、「我等と血を同じくするか土蕃の民俗と性情とに至つては、まざまざと古代日本の幻影を私に甦らし、その斉唱と舞踊と杵拍子とは、更にも記紀の歌謡を現前に揺蕩せしめたものであつた」（二七頁）とも記している。アミ族の舞踊を原始的と見なしながらも、差別するのではなく、日本との類似を見出して親近感を抱いている。ただし白秋は、先住民についてこれ以上の記録を残してはいない。白秋の文章に使われる、先住民およびその居住地に関する用語には、現在から見て差別的と思われるものも含まれるが、引用文中ではそのまま用いる。

- 11 佐佐木幸綱は、「歌人白秋は、そのごく早期から、色彩をこそ自身の表現活動の中心的な課題にすえていたのだった」、また「白秋は、色彩感覚が鋭敏で、かつその性向とも合致していたのだろう、色彩世界へと激しくのめり込んで行った」と論じている。色彩に敏感だった白秋が、台湾に対して熱帯的の鮮やかな色彩を強く求めていたことは想像に難くない。佐佐木幸綱「白秋の色彩感覚」『短歌』第三二巻第七号（角川書店、一九八五年七月）九一頁、および九二頁。
- 12 野上彌生子『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一五巻（岩波書店、一九九一年）七三頁。
- 13 野上彌生子の台湾観については、拙論「野上彌生子の植民地台湾の旅——感覚描写を通じた台湾認識」『比較文学研究』第九六号（東大比較文学会、二〇一一年一月）を参照されたい。
- 14 鳳凰樹は元来、植民地時代に台湾総督府がアフリカから移植した樹木である。六月ごろに散房状の赤い花をきれいにつける。また高さは二十メートルにもなり、枝を大きく広げて育ち、格好の日陰を作るため、台湾で多く植えられるようになった。現在では古都台南市の市樹に指定されている。
- 15 蘇峰は台北の近郊にある新店の風景について、「その沙洲の辺りにある楊柳やを眺め、此身亦た宛も南画景中に在る心地した」と書いたり、日月潭の近くにある大林について、「此辺背に青山を負ひ、其の両側に修篁を帯び、小高き所に、朱く塗りたる門があり、其奥に屋根が出で、其の附近を竹笠を頂きたる農夫往来す。正に是れ一幅南画である」と描いた。徳富蘇峰『台湾遊記』（民友社、一九二九年）二六頁、および六一頁。
- 16 野上は、「沿道の目に入るほどのものが新たで、異国的で、珍らしい。（中略）道と一緒に走つてゐる基隆河はうすく濁つて、南画に見るやうなかまぼこ型の舟が浮いてゐる。（中略）動物よりはただ龐大な石盤いろの塊まりのやうな水牛、その脊中に悠然ととまつてゐる、水牛が汚れてゐるだけに一層あざやかにまつ白な白鷺」と表現している。野上彌生子、前掲書、七四頁。
- 17 野上彌生子、前掲書、七八頁、および八一頁。
- 18 ただし、植民地台湾において内地人が厳しい現実と直面していたとの認識は、白秋独自のものではない。徳富蘇峰の『台湾遊記』にも、また野上彌生子の旅行記にも、それは記されている。しかし、一言述べておかなければならないのは、日本の文人や作家が目にしたのは、いずれも小売商売や動労者階級のことである。これに対し、植民地政府によって制定された、内地人の大資本企業を厚く保護や奨励する政策については、誰一人触れてはいない。
- 19 北原白秋「皇軍頌」、大政翼賛会文化部編『大東亜戦争 愛国詩歌集』（日黒書店、一九四二年）一九頁。